

# 住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1438号 1998年06月08日(月)

## 〈 higher dollar ahead 〉

7カ国蔵相代理会議開催の見通しなどあり、日本やその他先進国通貨当局の市場での動きには警戒と関心が向けられたものの、今週もドルが高値追いを持続する可能性が極めて高いと見ます。

その最大の理由は、引き続きアメリカ経済の強さを示す数字が多く出ていて、「介入の噂」などでドルが下がっても、同通貨を持続的に大きく下げる材料が見あたらないため。先週発表された数字の多くは、いずれもアメリカ経済の強さを示すものでした。

1. 5月の米雇用統計は非農業部門の就業者数が29万6000人と、予想の22万4000～22万5000人を大幅に上回り、また家計調査による失業率も4月の4.3%より上昇するとの見方にもかかわらず、同水準にとどまった
2. 4月の米新規住宅販売は5.2%も増加した。また、コンファランス・ボードがまとめている同月の景気先行指標総合指数は0.1%上昇して、4ヶ月連続のアップを記録した。同指数は1997年の4月以来下落していない
3. 4月の建設支出は0.8%増大したが、これは5ヶ月連続の増加である。工場受注は同月に1.2%増加したが、これは過去5ヶ月で最大の増加である
4. 米5月の自動車業界の売り上げは、1986年9月以来の最高を記録した。自動車・トラックで151万台と、昨年同月比で12.1%増加した。ガソリン価格の低下などが米自動車販売を押し上げた

などです。このところ調整局面入りしたと見られていたニューヨークの株価も、金曜日にはダウで167ドルも反発して、9000ドルの大台を回復した。また、アジアの経済情勢などを考えればアメリカが利上げに踏み切る可能性は極めて低いものの、同じアングロ・サクソンの国であるイギリスが、「経済の過熱」「インフレ発生の危険性」を抑制するために予想外の利上げ(0.25%)を行ったことも、アメリカに対する市場の見方を強いものにしている。

市場が気にしているほどには、日本の通貨当局を含めて各国の通貨当局は「円安」を気にしてはいないようです。アジアの危機を助長する危険性を理解しながらも、円安は日本

経済のファンダメンタルズを反映した動きと理解しているようで、だとしたらサミットや G7 声明の方向で為替相場が「ファンダメンタルズに従って動くのは当然」ということです。ルービン米財務長官は 5 日と 7 日に一部記者団に対して、「パリで開く G7 蔵相代理会議では、為替問題は主要議題ではない」と述べていて、彼のこれまでの発言の経緯からすれば裏表はなさそうです。

今週の主な予定は次の通りです。

9 日（火曜日）	5 月の卸売物価（日本銀行） 6 月の月例経済報告（経済企画庁） 欧州中央銀行（ECB）の初理事会 5 月のドイツ失業率 7 カ国蔵相代理会議開催の見通し
10 日（水曜日）	グリーンスパン FED 議長の議会証言 ドイツ連銀定例理事会
11 日（木曜日）	日本の 4 月の機械受注（経済企画庁） 5 月の米小売売上高
12 日（金曜日）	1 - 3 月の国民所得統計速報（企画庁） 日銀の金融政策決定会合

### 《 my first visit to Taiwan 》

ところで先週後半から週末にかけて休暇を頂いて台湾に行ってきたので、その印象を少しここに書こうと思います。「休暇」でしたが狙いはあって、それは「Computex Taipei '98」という「アジア最大」がうたい文句のコンピューター・ショーを見学するため。このショーに関心のあるコンピューター関連の 3 人の方々と一緒に行きました。ここで紹介できるような話もたくさん聞いてきました。

主催者側の発表によれば、「Computex Taipei '98」は 3 万 5 0 0 0 m<sup>2</sup>の面積を持つ会場（台北の世界貿易中心 World Trade Center）に 1,500 のブースを設置、8 5 0 社が出品。今年はまだ統計が出ていないようですが、9 7 年のこのショーには 3 2 0 0 人の日本人が来たという。今年もこれに近い数の日本人が参加したと思われます。

台湾コンピューター業界関係者によると、毎年開かれるこのショーの期間中に台湾の多くのコンピューター部品メーカーは年間受注の 3 割を売り上げるといふ。台湾のコンピューター産業の人達がこのショーに熱心になる理由はここにある。事実、このショーに行くとき名刺が束のように必要です。その名刺にはメール・アドレスが入っていることが条件で、ショーが終わった段階から双方にとって関心のある相手に相互にメール攻撃をするわけです。「攻撃」といっても、商売の話。

97年の台湾コンピューター産業の生産額は357億8500万ドルで、これは前年比26.2%の増加。台湾経済全体のここ数年の成長率は6%台（今年は無理らしい）ですから、この島のコンピューター産業が他の産業に比べていかに速い成長を遂げているかは明らかです。

こうした台湾のコンピューター産業の熱気は、今年の「Computex Taipei '98」でも肌で感じる事が出来ました。日本では名前を聞いたこともないようなパーツ・メーカー（筐体からマザーボード、各種ドライブなどあらゆる部品）がずらっとブースをもって自社製品を展示しているのですが、そこで会った店を構えている連中は例外なく要点を手短に話し、自信に溢れ、極めて forward-looking に見えた。「まだ立ち上げてないが... 売りましょう」といった話も多い。つまり「前に前に」とつんのめりながら生きている印象がする。街でみかける車の走り方もそうです。前に、前に.....と。活力があるのです。

台湾の今のコンピューター産業を育てた人々は、もともとは「鰻の養殖」や「養豚」をしていた人が多いという。彼らはそれでお金を貯め、アゼンブリーから今の世界的な地位を築いた。その産業がどのくらいの行程を来たかということ、台湾は今やアメリカ、日本と世界のコンピューター産業の大きな翼を担っています。

台湾の一部の工場の歩留まり率は、日本より良好だという。むろん、ここに至るまでには時間がかかっているのですが、「日本はまだなぜ日本国内でコンピューターを作っているのだ」と首を傾げる台湾の人々が多いとも。台湾で全部やれば、安くできるというわけです。ですから、「(もし自社製品名でのコンピューターが欲しかったら)俺達はいつでもOEMで生産してやる」という人達が多かった。その気になれば、アキアが何社も出来るのです。

富士通などの多くの日本のコンピューター・メーカーは台湾ではパソコンを作っていないと言う。数少なく作っているのは日本電気で、しかしそれは完全に Made In Taiwan だそうです。日本のコンピューター・メーカーが台湾で売っているのは、サーバーやスーパー・コンピューターなどの大きなマシンが多い。

### 〈 up to 25 % 〉

話を聞いていて日本の経済と台湾の経済が一番違うと思ったのは、「税制」です。台湾は法人税も個人所得税も最高税率は25%。日本の半分です。しかも、輸出に関する税金、企業を立ち上げる時の税金はなかったり、損金合算が出来たりと極めて“企業”、“起業”に優しい。日本は今の税率でも80年代は活気があったわけですから、税率だけが経済の活気を保証するものではない。しかし、「税制」は経済のあらゆる側面のベースです。税率だけ見ると、日本がアジアで産業を引きつける力は弱いように思う。

今回は急遽決めて来たために、台湾の産業界やその他の分野のトップの方々とお話を交わすことは出来なかったのですが、いろいろな人から話を聞くと彼らはほぼ例外なく英語を操り、中国語のみならずで大勢の前で演説が出来、受け答えが出来るといふ。「経営者の国際

化」は日本よりよほど進んでいるというわけです。経営者のアメリカ化も着実に進んでいるようです。「日本語を学んで、日本の企業に勤めても偉くなれない」という状況の中で、アメリカを学び、英語を勉強し、アメリカの企業に努めて成功へのチケットを掴むというのは、今の台湾では確率の高い道だということです。それから、いろいろな人と名刺を交換して感じたのですが、かなりのビジネスマンがメール・アドレスを持っている。日本ではまだ珍しい。対照的でした。

いくつかの例外はあるのですが、全体的にコンピューター部品の価格は、日本の価格よりかなり安い。つまり、台湾に来て部品を寄せ集めてデスクトップなりラップトップを組み立てれば、パソコンは日本の市価の半分ちょいで出来るのです。これはなかなか魅力的。多分かなり良いラップトップも20万ちょっとの価格で組立が可能です。パソコンはほぼすべての部品がパーツ化（共通化）していますから、少し知識があれば出来る。日本でもパソコン組立教室が出来始めていますから、これはメーカーがうかうかしているとブームになる可能性がある。それこそ「My Computer」というわけです。

パーツの取引単位は、ミニマム「100個」が多かった。つまり、一台二台では話にならない。ある程度量がさばける企業がこの商売に取り組むのには魅力がある、というわけです。アキアがそうでしょう。この台湾のコンピューター・ショーの会場を廻っていて、「日本のパソコン価格もまだまだ大きく下がる」と確信しました。

ラップトップには魅力的な商品が揃っていました。車で轢いても壊れないパソコン、水の中でも使えるパソコンなどなど変わり種が結構あった。ただし日本のラップトップに比べると、ちょい重い。全体的な印象ですが、「小型化・軽量化」には日本に一日の長があるように思う。話が少しずれますが、それは移動電話にも言える。日本のものからすると、台湾の移動電話は一世代前のものが多く、異常にでかい。

コンピューター先進国・台湾のホテル通信事情は、総じて良いようです。私たちが宿泊したホテルはそれほど良いホテルではないのですが、電話回線のジャックも日本のものと同じですし、それを自分で持っていったコンピューター（ラップトップ）につないで「0,00281.....」でつながった。小生のバイオが「0,」で使えたのはこれが初めてです。またホテルの一階にはいくらかでも自由に使えるインターネット接続のPCが置いてあって、空いていれば自由にただで使える。FTPも使えるし、便利です。こういったサービスは日本のホテルより進んでいると思う。

台湾にいる日本人達はほぼ例外なく、「台湾の人々は、日本人を大切にしてくれる」と言う。そう言われたからかもしれませんが、私が受けた印象もそうでした。同じように日本の支配を受けながら朝鮮半島の人達とこの島の人達の日本に対する印象が大きく違う理由は、来る前から私にとっても感心があった。

ある本には、「それはそれぞれを支配した日本人の最高責任者の個性の違い」と書いてありましたが、「日本があえて違う統治方法を試したからだ」という見方もある。ある日本人は、台湾の人々の日本に対する印象が良いのは、日本人が去った後に国民党の連中が外省人として来て、内省人を徹底的に弾圧して支配し、その結果「悪者」が入れ替わったからだ...とも解説してくれた。この問題は個人的にももうちょっと調べてみたい。

最後に、台湾はどうみてもまだ開発途上の国である。人々の着ているものは日本人から見ればまだ粗末だし、道路などのインフラは大きな区画では日本より優れているものの、一つ一つの小さい道の整備具合を見ると、まだひどい。しっかり下を見て歩かないと、舗装道路もでこぼこがあつてつまずきそう。全体的印象を言えば、汚い。街を疾走するスクーターやバイクを見るとタイヤを思い出すし、道路を走る車のマナーはと見ると「ない」と感じる。そう、どこか荒削りなのです。台北の殺人率は東京よりかなり高いし、地方には日本のやくざのような組織も巣くっているという。

しかし、わずか数日ですがこの島の活気は十分感じる事が出来ました。今の台湾の人々にとって何が心配かといって、「それは日本の事だ」ということでした。経済が直結しているからです。台湾と日本の関係は、その地理的近さから言っても、歴史的なつながりから言っても今後ますます深まるでしょう。

### 《 many fun places in Taiwan 》

東京はどうだったかしりませんが、台湾は4日いるうち3日雨が降ってしまい、天気にはまったく恵まれませんでした。しかし、せっかく台湾にまで来たので観光もしました。台北で一番の定番は故宮博物館でしょうか。中国の長い歴史を見ることが出来ますが、わずか数時間では全部は見れない。とにかく大きいのです。

お寺は二つ見ました。龍山寺と行天宮。印象に残ったのは、後者です。青い服を来た人々がなにやら祈りを捧げていて、非常にエキゾチックな印象がする。印象に残ったのは、若い人も熱心にお祈りを捧げているのです。膝を折り、何回も頭を下げて。私も膝置きにちょっと膝を落としてやってみました。願い事は何でもかなうと書いてある。龍山寺には行き場を失ったような老人がたむろしていて、有名だし歴史もあるのでしょうがあまり良い印象は残らなかった。行天宮の方がエキゾチックです。

よく食べもしました。腸明山の袂にある「禾園」は忘れられない。温泉があるのです。食事の最中でも、それ以前でも一人部屋の硫黄温泉ルームに軽く入って気分をすっきりして食事が楽しめる。温泉は硫黄の臭いが強く（ですから天窓が常に開いている）またお湯も白く濁っているのですが、それがまた異国情緒があつて良い。料理も、ダイナミックだった。

「桂桂保齡球館」(松江路 223 号)というボーリング場の下にあつた「榮星川菜餐廳」(2506-6899)の四川料理も素晴らしかった。ちょうど我々が行ったときにその会場で結婚

式をやっていた。12人座れるテーブルが26卓並ぶ大きな結婚式で、我々はその同じ会場に入れられたので。最初は気が付かなかったのですが、店の人が「今日はここでこれから結婚式がある」と教えてくれた。それからは、写真をとったり観察したり。台湾の結婚式は参加者だけの締め切った部屋でのそれではないのです。

花嫁さんはウェディング・ドレスで綺麗に着飾り、大きな会場の控え室からお婿さんと主賓達が座る会場の一番テーブルに移動する。日本のように一段高い雛壇はないのです。その新婚さん二人の後ろの壁には、

**「天作の合」**

**「永結同心」**

**「才子佳人」**

と書いてある。なるほど。例の「喜」の字が二つ並んで、それが で囲まれている。今回レストランの人に聞いて初めてその意味が分かった。なぜ「喜」が二つ並んでいるか。これは、結婚は二人です。従って「喜」が一つではダメで、二つ必要だ。しかも、円満なように の中に入っているというのです。

日本の結婚式よりはるかに型にはまらないと思ったのは、まず会場そのものがオープンであること。日本から来た我々が食事をしているその部屋の30メートルくらい離れたところで式をやっているのです。レストランで食事をしている人なら誰でも見る事が出来る。新郎新婦が入場するときに、ファンファーレが鳴るわけでもない。全員が拍手をするわけでもない。二人が入ってきたことを見つけた人達が寄ってきて、クラッカーを響かせるだけです。まあ最後まで見ていたわけではないのですが、式そのものが非常に実質的な印象がした。正装している人あれば、普段着の人あり。このレストランは、また行きたい。

今回の台湾旅行では、日本語が分かる方々では漢華創業投資の田中副董事長、IFCTの高橋總經理、Walsin Lihwa Groupの馬場副董事長、台湾通信の早田発行人、台湾富士通のYi-Wen Wuさんなどに話を聞くことが出来ました。MANY MANY TKS。このニュースの読者は台湾にも多いらしい。台湾の皆様、また機会がありましたら行きますので、宜しく。今週末もこのニュースは休みます。皆様には良い一週間を。

<http://www.ycaster.com/>